

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1990年

11月号

(通巻104号)
400円

ポーランド月報

グダンスク協定10周年 ワレサ/マゾヴィエツキ

民主主義ポーランドをいかに築くか ROAD/中央同盟

rys. Henryk Sawka



終わりのない革命…………… 3

グダンスク協定10周年記念行事

歴史の新しい瞬間に挑戦する…………… 4

「連帯」記念集会でのT・マゾヴィエツキの演説

違いははっきりさせよう…………… 6

「連帯」記念集会でのL・ワレサの演説

民主主義ポーランドをいかに築くか……………10

ROADと中央同盟に聞く

POAD創設者声明／中央同盟の経済信条……………13/17

ポーランド日誌 1990年8月25日～9月12日…………… 2/19

ポーランド日誌

1990年8月25日～9月12日

8月25日 ワレサ委員長『ジチェ・ワルシャウィ』紙のインタビューで「来た大統領選では有権者全員に投票を義務づけるべきだ」と発言。

8月27日 世論調査センターC B O Sの調査によれば、政府経済計画(バルツェロヴィチ計画)支持率は16%下がって26%になり、「支持しない」は24%に。

8月28日 チョルシュティン近郊のドゥナイェツ川で環境破壊を理由にダム建設反対の道路封鎖をしていた人々を警官隊が排除。封鎖に参加していた「自由と平和」、緑の党、その他の環境保護活動家は、今後も反対運動を続けると語る。

8月29日 中央同盟、国民にヤルゼルスキ大統領辞任を求めよう訴える声明を発表、辞任要求請願署名集めを開始。

8月30日 グダンスク協定10周年記念日を翌日に控えマゾヴィエツキ首相がグダンスク入り、グダンスク、クティニア両造船所の労働者による集会に参加。J・アンブロジーク、J・クローン、T・スィリイチクの3大臣も同行。●「連帯」委員長付属市民委員会が「ポ

ーランド平和賞」創設を発表。選考委員会議長はワレサ委員長。

8月31日 グダンスク協定10周年記念日。造船所内の記念式典でマゾヴィエツキ首相とワレサ委員長が演説(2人の演説は本誌4ページ以下)。午後には記念ミサやスポーツ大会。この間、マゾヴィエツキ首相とワレサ委員長は50分の会談を行ったが内容の詳細は明らかにされず。●反ワレサ派労組「連帯80」はシチェチンのヴァルスキ造船所で独自の10周年記念行事。●P A P通信、ワレサの新顧問団の顔ぶれを伝える。カトリック系知識人アンジェイ・ミツェフスキを団長に、経済学者ステファン・クロフスキ、社会学者ヤドヴィガ・スタニシキス、社会学者アンジェイ・ティモフスキら13人。●ポーランド、世界銀行と3億ドルの新規借款に調印。

9月1日 バルト海環境保全の国際会議がスウェーデンで開催(3日まで)、マゾヴィエツキ首相とカミンスキ環境保護相が出席。●ワルシャワで「市民運動—民主行動(ROAD)」創設委員会が会合、ヤルゼルスキ大統領の早期辞任と早急な国民投票による大統領選を求める方針を決定。また国会選挙を来春、大統領選は年内に行うことを支持。●テレビがギエルク元第一書記とのインタビューを放映。●ポーランド人の西

【19頁へ続く】

終わりのない革命

グダンスク協定10周年記念行事

“Nie zakończona rewolucja”

Tygodnik Solidarność, Nr.36(103), 7 września 1990

2週間以上も続いた1980年の大ストライキ記念行事は8月31日にクライマックスを迎えた。それはポーランド全土を巻き込んだ。そして「連帯」の友人たちがわれわれと共に祝ってくれたという意味では、世界中を巻き込んだとも言える。行事の中心はグダンスク造船所の栄光あるBHP〔労働安全衛生〕ホールだった。

「8月合意」の署名者たちが集まった——レフ・ワレサをはじめとするMK S〔80年8月の企業間ストライキ委員会〕の代表たち（ただ、アンジェイ・グヴィアズダとアンア・ワレンティノヴィチは招待を断り、出席しなかった）、それに当時の党＝政府側代表たちのミエチスワフ・ヤギエルスキ、タデウシュ・フィシュバフ、イェジ・コウォジェイスキ。タデウシュ・マゾヴィエツキ首相（MK S顧問だった）や政府メンバー、国会議員、「連帯」全国委メンバー、教会代表、世界中の労働組合本部の議長、各国外交団もやって来た。

ヤルゼルスキ大統領は招待されなかった。RO AD〔市民運動—民主行動〕の指導者たちの多くも欠席した。式典は、造船所「連帯」議長ズビグニエフ・リスの求めにより、ポーランドとポーランド人の自由のために闘い、命を捧げた人々への1分間の黙禱で始まった。

「われわれは『連帯』を組織した、しかしそれはわれわれにポーランド問題の重荷を背負わせた」。レフ・ワレサは言う。

「われわれは地味な改良を望んでいた、ところが社会がわれわれに期待したのは次の大跳躍だった。ある人々はわれわれと手を切り、またある人々は社会活動の意味に疑いを持った。われわれは大きな仕事をやり遂げた、しかし多くの問題は進展があまりにも遅過ぎた。下院、上院、政府の偉大な仕事も生活の場（社会）においてはあまりに

も弱々しく映った」。

「われわれの前には幾多の挑戦が待ちかまえている（……）。『連帯』の力は、（今は）闘いではなく、統治の技量において期待されている。われわれは現代で最大の試練を克服するだろう」。

「私には分かる」。ワレサは続ける。「さまざまな意見、世界観、原則案が現れるに違いない。私の考えが唯一であると言うつもりはない、しかし、私は私の考えの正しさを深く信じている、腹藏なしにそれを他の人々の考えとの比較検討の場に委ねるつもりだ」。

マゾヴィエツキ首相の話は調子が違っていた。「80年8月」について語るなかで彼はとりわけ特徴的な点として3つを挙げた。ストライキ参加者たちの市民的意識、キリスト教的諸価値の訴え、平和的手段によるポーランド改革実現可能性への信念、である。今日という日について彼はこう語った——「どれくらい道のりを過ぎたのかは知らない、4分の1なのか、半分なのか、それは少ないのか、または多いのか。しかし、わが国とわが国民がたどった道の偉大さは知っている。これからもさらなる改革の継続が求められる。その改革には安定性と確実性が求められる。私は改革の側につく。（……）私は裏に潜む敵意と国民の分裂の危険性を警告したい、そのためには、意見の違いをはっきりさせ、論争を行い、政治闘争をも辞さない」。

世界中からやって来た労働組合の代表らは「連帯」の貢献に注目した。その誰もが強調したのは、「連帯」が中欧および東欧のみならず、他の大陸の国民に対しても、強権に服従することなく自由と民主主義へ到達できることを示したという点だった。

レフ・ワレサとタデウシュ・マゾヴィエツキの

論争を示唆する下りでは嵐のような拍手喝采があった。参加者の大部分が、戒厳令は違法にも国民に狙いをつけて導入されたものであることを上下院の国会議員が認めるよう求める「連帯」グダンスク地方本部の宣言を集会閉幕時に読み上げることに同意した。

造船所での集会のあと、来賓たちは従業員食堂で昼食をとった（1981年12月13日と1988年5月、8月にストライキ本部が置かれた場所である）。政府側と組合側は別々に座った。

記念行事の第2部は造船所の第2正門側にある「連帯」広場で始まった。造船所犠牲者記念碑の下に湾岸3市と全国からの代表たちが集まった。首相〔マゾヴィエツキ〕は議長〔ワレサ〕とともに、「連帯」のために命を捧げた人々を讃える銘板の除幕式と、造船所犠牲者記念像への献花式に出席した。

グダンスク主教管区長のクデウシュ・ゴツウォフスキは記念ミサの開始にあたりこう語った——「今日は十字架のもとで、われわれの世代のポーランドが追い求めた自由に対して感謝の歌“Te Deum”を歌いましょう。今日、全ポーランドが私たちとともにあり、神の祝福を祈っています、今後は目に見えない隷属の絆から逃れられますように、そして、分裂にみられるような誤解から、勤労精神の退化から、家族生活の過ちからも私たちが逃れられますように」と。



ノヴァタ製鉄所の「連帯」事務所

首座大司教は説教でこう語った——「私たちは「連帯」を、これまでのすべての歴史の流れを貫いている避りの力であると考えます。(……)」。

首座大司教は「連帯」の課題のそれぞれに対して理解を示し、ポーランドとしてのアイデンティティの成長を認めた。

ミサはヨハネ・パウロ2世からの祝福と首座大司教による（文化人たちの建てた）21項目要求記念碑の除幕と聖別で終わった。

その晩おそく、記念行事はソポトにある野外オペラ劇場での「連帯」コンサートで幕を閉じた。

〔訳：篠崎 誠一〕

歴史の新しい瞬間に挑戦する

「連帯」記念集会でのタデウシュ・マゾヴィエツキの演説

T.Mazowiecki's Speech at Solidarity Anniversary Meeting, 31 Aug. 1990
Uncensored Poland News Bulletin, No.17/90, 19 Sept. 1990

議長ならびにポーランドと外国からの敬愛する客人たち、そして友人たち、本日私は、個人的にこの場所に特別なつながりを持つ人間としてここにやってきた。だが、何よりも私はポーランド共和国政府の首相として、私がこの式典に参加する

ことにより、本日のこの歴史的な日付がポーランド国家を形作った、新しい民主主義ポーランドを形作った重要ないくつかの日付に永久に加えられることを期待してここにやってきた。

われわれは今日、あの偉大な、重要なでき事の



グダンスク協定記念ミサに臨む関係者。左3人目から順にフィシュバフ・グダンスク県党第一書記（当時）、ヤギエルスキ副首相（同）、ワレサ委員長、マゾヴィエツキ首相。

10周年の記念にここに集まっている。当時をあらためて熟考するために、同時にこの10年間の困難な年月とそして今日について熟慮するために。

働く人々の代表が、そして働く人々自身が深く関わったという事実によって、われわれには絶対に忘れることのできないあの日々、何よりもまずこの造船所——そして、シチェチンやシロンスクのヤシチシェンベ、その他多くの場所——と結びついたあの日々。国家を変革する、全状況を変革するという市民の要求のあの崇高さが、ここで合意された諸要求を、交渉を、変化を求める努力をはっきりと特徴づけていた。

第2の特徴は、本質的で比類なく深い特徴は、この会議室に掲げられた十字架と造船所の門のところに掲げられたローマ法士の肖像が象徴するキリスト教の諸価値との結びつきである。わが国民につねに深く根ざしてきた諸価値、国民に道を指し示してきた諸価値、1年前、ヨハネパウロ2世のポーランド訪問によってさらに強められた諸価値との結びつきである。

最後に、平和的な手段によってポーランドの変革を実現できるという信念をあげなければならな

い。この考えに対する信念、確信、忠誠。

以上3つの要素のすべてがわれわれの意識、われわれの態度、われわれの歴史の中に永久のもととして組み込まれたのだ。

やがて困難の年月が来た。「連帯」を奪い取られたその年月、われわれは——1989年にこの造船所で——宣言した、「連帯」なくして自由なし、と。こうしてわれわれは、市民の社会的組織の承認というこの偉大な大義を抜きにしては、ポーランドにおける問題の真の解決、民主主義へ至る道の建設はありえないという真実を明らかにしたのだ。そしてそれは現実のものとなった。それは、人間の本性に根ざすものであったがゆえに、現実とならなければならなかったのである。全体主義の体制に抗して、人間の諸権利の実現に向けて道が拓かれた。これは、不屈の抵抗と闘争の結果として実現されたのだ。

そして最後に、いまわれわれは今日について、この困難な今日について熟慮することを求められている。どれだけの道のりをすでに進んだのか、私にはわからない。4分の1なのか、半分なのか、それとも終わりが近いのか。私にわかるのは、祖

国と国民が歩んでいるのが偉大な道であるということだ。ポーランドが抱える諸問題の解決のためには、いたるところで文字どおり丸を四角に変えるような、痛苦に満ちた困難な選択が要求されている。ポーランドはこの道の先頭を進んでいる。経済の作り直しという前人未踏の道である。このためには、首尾の一貫性と時間が必要である。

ポーランドが置かれているヨーロッパは以前とは違っている。この新しい状況のもとで、ポーランドは新しいヨーロッパの形成を促進する重要な1要素となることができ、そうした機会を与えられている。ヨーロッパにただ復帰するだけでなく、その変革に貢献するのだ。このためには、わが国の変革を一貫性をもってさらに進めてゆくことが必要だ。それには、安定とこの変革に対する確信が欠かせない。私は、そして私が代表する政府は、この変革を首尾一貫したやり方で最後まで推進することに賛成である。議会および大統領選挙をはじめとするポーランドの民主的変化の今後の日程を皆で決定してゆくことに、協力し選挙の期日を定め、整然としてそれに向かってゆくことに賛成である。

「連帯」とその周りに形成されたすべての勢力もまたまったく新しい情勢に直面している。ポーランドは強力な「連帯」労働組合を必要としている。社会市場経済を本当に作り上げるためにだ。社会市場経済は労働組合が強力な役割を演じることを必要とする。「連帯」の周囲に生成、発展したあらゆる社会的、政治的な勢力が、それぞれの

信じるるところに従って自ら自身の道を見出さなければならぬ。多元的で多様な道を。しかし、祖国は各自の力をあわせることを必要としているという事実を忘れてはならない。

われわれは今、重要な決断を下さなければならない。選択は異なってくるだろう。信ずるところも違ってくる。各自の道は別々になるかもしれない。願わくば、これが現実的な議論と現実的なプログラムの闘いとなることを。われわれすべてを——自らを「われわれ1980年8月の人間」と呼ぶことのできるすべてを——ひとつに結んできたすべてのものの名において、われわれがこう言えることが決定的に重要である。つまり、ありとあらゆる相違にもかかわらず、そしてお互いに対立する、場合によっては政治的に対立することがあっても、われわれは絶対に敵同士ではない、と。

今日の午後、あの十字架の前に立つ時、われわれはお互いに平和のサインを交わすことを期待している。それは、たんなるジェスチャーではなく、ひとつの約束でなければならない。たとえ立場を異にして論争し、さらに政治的に争うとしても、われわれは危険な敵意を誘い出し、国民を分裂させるあの境界線は越えない、という約束である。

本日の集会は、壁に刻まれた詩篇の言葉の朗読で始まった。私の話を終えるにあたって、この詩篇に含まれる思想に言及することを許されたい。

「歴史の新しい瞬間に挑戦する力を神が民に与え給うことを信じる」。

[訳：水谷 駿]

違いははっきりさせよう

「連帯」記念集会でのレフ・ワレサの演説

Lech Wałęsa's Speech at Solidarity Anniversary Meeting, 31 August 1990
Uncensored Poland News Bulletin, No.17/90, 19 Sept. 1990

[1990年8月協定の10周年は8月31日にグダンスク造船所で祝われた。以下に紹介するのは、そこで行われたレフ・ワレサの演説テキストである。]

演説を始める前に、当時の関係者、とりわけヘンリク・ヤギエルスキ副首相がここに出席されていることに対して主催者として歓迎の意を表明し

たい。われわれも10年前にこのホールにいた。全世界がかたずをのんでわれわれを見守りながら、その後一貫して想起され続けることになった政府とストライキ参加者の間の協定調印の瞬間を待っていた。ポーランド人としてポーランド人に話しかけているいるのだというわれわれの言葉は受け止められた。当時、わが国の歴史上はじめての無血革命と国民蜂起をわれわれが開始したのだということとわれわれはまだ完全には自覚していなかった。最初からわれわれの唯一の目的は対話だった。われわれは、われわれ自身について、われわれの職務について、われわれの職場について、ポーランドについての話し合いを望んだのだ。

それは力ではなく言葉と議論によって象徴された。当時対話の決定を下した人々の功績は認められるに値する。われわれは彼らの真剣な意向を信じ、1980年8月の歴史的なグダンスク協定に関する彼らの保証と署名を信用した。だから、16カ月後に彼らが対話を中断し、その約束を破って、戒厳令を敷いたのだから、今や神と歴史とわが民族自身の前で彼らに己の良心を問わせようではないか。

われわれは「連帯」を結成した。そしてわれわれの困難でときとして絶望的な課題は「連帯」が自ら引き受けた。それは事件のときにわれわれが身を隠す盾になった。それはわれわれを守り、拡大を始めた。われわれがそれにますます多くの問題を引き受けさせたいと考えたからだ。「連帯」はポーランドの希望の木だった。

その花が開き始めるか始めないうちに1981年12月の夜の突風が最初の花々を切り落してしまった。多くの人々にとって、この木は再び花開くことは決してないし、たち枯れてしまい、決して実を結ぶことはないだろうと思われた。そうは信じなかった人々も、諦めてしまった人々もいた。また海外に逃れた人々もいた。けれども、8月の勢いは、冬には眠っているが春が近づくと生氣を取り戻す生命力をもつ樹液に似ていた。

「連帯」のおかげで新しい春が再び訪れた。われわれは最初の選挙に勝利した。この選挙は完全な民主主義ではなかったが、それが円卓会議でわれわれの結んだ契約だったのだ。しかし、一般国民



民はそれにノーと言った。われわれは漸進的变化を望んだが、人々はわれわれからそれとは別の飛躍を期待した……

われわれは自分の勝利を他の人々と分かち合うことを望まなかった。従って、われわれから去る者もいたし、公的活動の意味を疑問に思う者もいた。われわれは多くのことをなしたが、多くの問題はあまりにもゆっくりとしか進んでいない。上下両院や政府の大仕事は社会生活にとって重要な場にはあまりにもわずかしか反映されていない。

1989年夏、われわれは東欧・中欧で真の「諸民族の春」を経験した。しかし、すべてはここ、1980年8月のグダンスク造船所から始まったのだ。孤立していないという自覚をもちながら、この10年間われわれは革命を推進してきた。ここでともに歩んできたすべての人々に心から感謝の意を表明しておきたい。しかし、革命はまだ終わっていない。

だから、開始された作業を未完のままにはおけない。そのままにしておいてはならない。今やわれわれは「連帯」誕生当時の闘争を何か質的

に新しいものに変えていくという次の挑戦に直面している。かつての「連帯」が保持していた闘いの場での同志的絆は捨て去ろうではないか。「連帯」の成熟度は闘いの技術にあるのではなく、統治の技術にある。そして、われわれが切り抜けない限りならない今日の最大の試練とはまさにこの点なのだ。私も私の仲間も高官のポストを争って自らの品位を落とすようなことは絶対にしない。これはわれわれの活動の目的では決してなかったし、今後も決してそうならないだろう。しかし私の理解では、見解の相違や展望、基本概念をめぐる相違があるはずだ。私は自分の意見だけが唯一のものであると主張するものではないが、自分の意見が正当であると深く確信しているので、それ以外の意見とは公然と対決する積もりである。考えや概念ならびにそれを唱える人々を互いに闘わせようではないか、だが悪意や敵意をもってではないやり方を通じて。ともに仲間であり続けようではないか。なぜなら「連帯」の考えはさまざまなやり方で表明できるのだから。

新しい時代には新しい旗、異なった言語が必要である。現在の「連帯」は、人種差別主義や民族

主義や反ユダヤ主義のかけらもない共同社会という意味をもつ、われわれの中にある独自の価値観のシステムである。それは多様性の中の統一である。多様性がなければ進歩はあり得ない。「連帯」は機会均等を守る唯一の組織である。

われわれは以前の局面とは異なる新しい局面に入り始めている。前の局面では、われわれは何を、いかにすべきかが分かっていた。現在分かっているのは何をなすべきかだけで、それにいかに取りかかるべきかについては分っていない。正しい道を見つけ出すには多くの意見の対立や討論が必要である。だから、この偉大な仕事は今日エリートの問題に直面しているのだ。そしてちょうど10年前に造船所でそうであったように、今度もエリートは私たちを助けなければならない。打倒された社会主義的民主主義の非人間的システムの代わりに「連帯民主主義」を導入することは許されない。

われわれには消え去りつつある制度が残した真空を埋める民主主義がかけ値なしに必要である。これが、知識人にとって、われわれ「連帯」出身の政治家にとって最も重要な課題である。われわ



21項目要求記念碑除幕式に向かうワレサ委員長とマゾヴィエツキ首相（8月31日）

これは、戒厳令ならびにそのときに権力の座にいた人々によってそがれてしまった1980年当時の熱情を再び取り戻す方法をまだ思いついてはいない。現在取り組んでいる仕事に社会の広範な民衆を参加させるようなメカニズムを作り出す必要がある。そうしなければ、エリートは単独ではわれわれをよりいっそうヨーロッパに近づける新しい民主主義制度を作り上げることはできないだろう。経済的、政治的、法的改革は、情熱を引き出すべきであり、決して消極的態度や懸念や懐疑を引き起こすようなものであってはならない。こうした改革は開いたベテランであるわれわれだけでなく8月後の世代にも希望を与えなければならない。

われわれがこの新生ポーランドを建設しつつあるのは自身のためでも、地位やポストのためでも、自己満足のためでもない。すべての人がそれに参加して、当面する最も緊急な問題——生活のチャンス、職務の熟達、労働の尊厳、規律正しい生活——を自身のものであるとみなさなければならない。

われわれ全員が新しい意識に向けてゆっくりと成熟しつつある。われわれは歴史の重荷から自身を解放しつつあり、今日何をなすべきかについてのわれわれの理解は深まりつつある。かつて破壊することなく勝利する方法を日々学び取ったのとちょうど同じように、今日われわれは法治国家および現代世界に適する経済原則ならびに21世紀の入口となる社会をいかに建設するかを日々学びつつある。10年後——すなわち、われわれがこの間ともに過ごしてきた期間と同じ長さ——には21世紀がこの問題に結着をつけていることだろう。

われわれが何を達成するか、果たしてわれわれが諸国民の一員たりうるか否か、さらには果してわれわれは千年のキリスト教の歴史をもつ国民に値するか否かを決定するだろう。遅れた文化と無宗教の社会の前例とならないようにしよう。この挑戦はまた、われわれの今日の生活が多くて要素からなることを示すよう要求している。決定するためには、選択しなければならない。われわれが新しい独占を携えてヨーロッパに加盟すると必ず疑惑を引き起こすことになる。

ヨーロッパの諸国にも統一はない。さまざまな

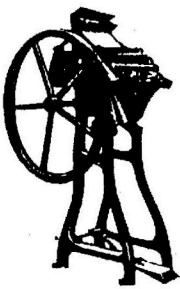
イデオロギーとさまざまな政党が存在する。だから、偽りの統一を作り出さないようにしよう。もしわれわれが通常のヨーロッパの中で通常でありたいと思うならば、相違をもつことが必要である。それが生活なのだ。なぜならそれが人間のあり方だから。それが私の望みである。すでに始まったわれわれの歴史の章を終わらせ、新しい章を開始するのはわれわれ全員の望みだと思う。

新しい章はわれわれの後継者によって作り出すことができる。すべての時代はそれ自身の挑戦課題をもっており、それを引き受けなければならない。この挑戦は共通の幸福であるポーランドに対して特別な関心を寄せるようわれわれに要求している。まず何よりもわれわれはポーランド人であり、その次に政治家や労働組合員であるにすぎない。われわれは自身のさまざまな経験にもとづいてポーランドを建設している。誰もこの仕事を怠ることはできない。なぜならわれわれの繁栄はわれわれに外から与えられるものではないからである。それは偉大な任務であり、われわれもまたそれを引き受けなければならない。われわれはこの任務にふさわしいものになることを望んでいる。

[訳：湯川 順夫]

TWZ
TAJNE WOJSKOWE ZAKŁADY
WYDAWNICZE
1941 - 1944

Dochody ze sprzedaży przeznaczony
na rozwój kolportażu



z 100 Poczta Nieszawska druk STOP

Pamięci drukarzy TWZ

民主主義ポーランドをいかに築くか

ROADと中央同盟に聞く

Solidarity's Offsprings—ROAD and Center
Gazeta International, week 34/1990

【編集部注】 前々から大統領選出馬を表明していたワレサ委員長に続き、マゾヴィエツキ首相もついに出馬の意向を明らかにし、11月25日の投票に向けてポーランドは動き出した。両候補の支持母体である中央同盟（ワレサ派）と「市民運動—民主行動（略称ROAD）（マゾヴィエツキ支持派）の考え方を紹介する。これはポーランドの週刊紙「ガゼタ・インターナショナル」（「ガゼタ・ヴィホルチャ」姉妹紙）が行ったインタビューで、ROAD側は創立メンバーのひとりであるヤン・コフマン（「クリティカ」誌編集長、ポーランド学術出版社代表）、中央同盟はやはり創立メンバーのヤツェク・マジラルスキ（「週刊連帯」副編集長）が答えている。聞き手は「ガゼタ・インターナショナル」紙のジューン・ドピヤ（ROADインタビュー）とヨランタ・コザク（中央同盟インタビュー）の両記者。なお、このインタビューは8月初めに行われたものである。

〔訳編：高橋 初子〕

ROADはどのような役割を果たすのか

ヤン・コフマン：インタビュー

ROADとはどんなものか？

——市民運動—民主行動（以下ROADと略）のなかにおけるあなたの役割は？

——私は運動の創始者のひとりだ。

——現時点で何人くらいがROADに参加していますか？

——おそらく4000か5000人はいらと思うが、誰も正確な数字は把握していない。

——ROADの支持者はどんな社会グループから出ているのですか？

——知識人が主だ。しかし、あらゆる種類の人からROADに参加したいと電話がかかってくる。その中には労働者もいれば、誕生しつつある

中産階級の人もおり、私営セクターの人さえいる。

7月中旬のROADの呼びかけへの反応と、それに続いて行われたワルシャワ工科大学での集会の成果は、主催者の予想を超えるものだった。この運動への参加に関心を持つ人々があんなにたくさん出てこようとは、誰も考えていなかったのだ。

この運動の規模を、加盟者の数や創立メンバーの数ではかるなら、ROADは現在作られつつあるどの政治グループとも——中央同盟とでさえ——比べものにならないくらい大きい運動だ。

統計的に見て、ROADはここ数カ月のうちに、中央同盟と並ぶ主要政治勢力になっていくだろうと私は考えている。そして、少なくとも現時点で見れば、来たる大統領選挙や国会選挙の中心勢力のひとつになりそうだ。

——中央同盟以外の政治グループとROADの力を比べるとどうですか。

——ポーランドにはもうひとつの勢力がある。農民運動だ。農民運動がどういう役割を果たしてゆくのかを言うのは難しい。おまけに農民運動の内部は分裂している。私の見るところ、最も強い要



© Jacek Marczewski

素はロマン・バルトシチェ率いる農民党（旧統一農民党）だ。

しかし、この党が、誰が誰を導いているのか不明瞭なタイプの農民政党であることを忘れるべきではない。この党の指導部の一部分は、民主的反対派すなわち「農民連帯」から来ている。しかし基本は、共産党と手を結んでいたあの統一農民党なのだ。

ROAD、中央同盟、農民党の3つ以外の政治グループが重要な役割を果たすことはなさそうに思える。しかしここで各地方の市民委員会の問題が持ち上がっている。

私は各地の市民委員会がポーランドの民主的変革の基盤になれると思っていた。言葉の最も広い意味での「連帯」の基礎になれると。

しかし各地方市民委員会は独立した存在でありたいと望んだ。それらの市民委員会は「票数計算機」と呼ばれたものだが、本当に票数計算機になっていくだろうか？ そして誰に投票するのか？

——「連帯」内部で生じてきたこの分岐は、どの程度まで自然なもので、どの程度まで個人の政治

的野心によるものなのでしょうか。

——それはよくわからない。ただ、この分岐は人々の政治的野心や、自分の政治的影響力が十分に大きくないと感じた一部の人の欲求不満によって加速されていると思う。

——誰の野心のことを言っているのです？

——中央同盟に属している人々に、よりそれはあてはまる。彼らは、彼らの描く政治的シナリオを実現するためには現在の政治改革のテンポが遅すぎると考えている。

しかし問題は、エリート指導層の人事異動を今すぐ行うべきか否かということにある。私は漸進的な道の方を支持している。ズビグニェフ・ブヤク（ROAD指導者のひとり）の言う「騒動なき前進」に賛成だ。

とはいえ、政府がどうにかして改革のスピードを上げるべきだという考えにも賛成だ。「改革加速化」は中央同盟の専売特許ではない。私の属するグループも含め、様々なサークルが改革加速化の処方を書いている。

今後、ROADは地方レベルの組織づくりに着

手してゆく。草の根の支持が得られるだろうか？

もし得られれば、ROADは政治運動になっていき、一定の時間がたてば政党へと結晶化してゆくだろう。

ROADの基盤

「党」という言葉は嫌われているのですか？

——ポーランド社会全体に、その言葉への嫌悪が満ち満ちている。共産党の影がわれわれの上のしかかっているのだ。私の考えでは、4～5年のうちに政治構造の創造の過程が始まるだろう。

ここで覚えておかねばならないのは、ピラミッドがさかさまにびっくり返されたということだ。わが国の社会の30%以上は農民だ。われわれが強い農民政党を持てるという意味では、これは良いことだが、生産者としての農民の数は少ない方がよいことを考えれば、これは良くない事態といえる。

またわが国には伝統的産業構造のなかに多数の労働者階級が存在する。しかし西欧民主主義の中堅をなす中産階級はわが国にない。つまり、中小企業経営者や私営企業従業員が多くはいないということだ。かわりに、彼らとは全くもの考え方の違う国営企業従業員がいる。財の80%が国の手の中にあるなら、いったい何をどうすればいい？

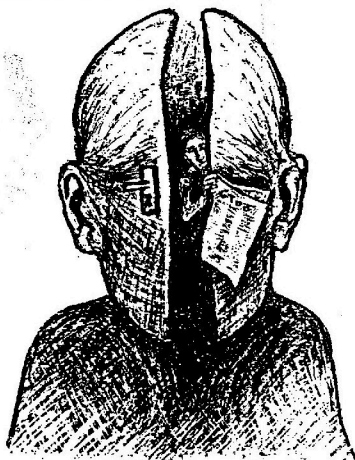
西欧民主主義国では全く違う構造になっている。わが国でもそうした構造が発達し始めた時、ようやくわれわれは、西側で通用している（われわれの考える）規範に従った「政党生活」を創出し始めることになるだろう。

——ROADは一部の人から「知識人の運動であり、平均的ポーランド人、特に労働者とのつながりが希薄だ」と言われていますが。

——人々はまさにそう言うね。でも中央同盟だって労働者とのつながりを持っているのかどうか。

——私がお聞きしているのは中央同盟のことでなくROADのことです。

——労働者がわれわれを支持してくれるかどうか今ここで言うのは難しい。ただ、ROADメンバ



Rys. Zbigniew Nagalski

ーの中にも何人か労働者がいる。

ROADは安定化と漸進的変化的路線を歩む運動なので、農民の中にも労働者の中にも支持者を見つけられると思う。われわれは労働者に近付き、ROADを支持するとどうい利益があるのかを彼らに示してゆく必要がある。われわれは、社会の中の色々なグループに受け入れられるようなプログラムを作らねばならない。

報道と出版について

——あなたは、最も信望のある政治雑誌〔『クリティカ』〕の編集長であると同時に東欧最大の出版社〔ポーランド学術出版〕の長ですが、ROADのメンバーであることは、あなたの仕事にどうい影響を与えるのでしょうか。

——何ら影響はないだろう。影響があってはならない。

政治運動とは、一定の人間の価値を守りながら、ある特定の政治問題に対処してゆくべきものだ。その人間の価値とは、人種差別とか民族主義に反対し、各国民の権利を尊重する人間社会をめざす

ことだ。

これらの諸価値は私にとって最も基本的なものだ。そして『クリティカ』はこれらの価値を代表し擁護している。だから、もしROADがこれらの価値を尊重しなければ、私はROADに参加していなかった。ただしそれは『クリティカ』編集部全員がROADに参加すべきだという意味ではない。もっとも、大部分の人は参加したが。

べつに、出版人は政治にかかわらねばならないと言っているわけではない。しかし同時に、逆の状況というものもあり得ない。出版人はそれぞれ政治的見解を持っている。大事なのは、それを書き手に押し付けないということだ。私もそれはしたくない。

——ポーランドには、どの程度自由な報道があるのですか。

一 世論に何らかの影響を持つ雑誌の出版に、物資面も含めて最大限の可能性が保証されていれば、ポーランドには自由な報道が見られるようになるだろう。

マスメディアは実際、第4の勢力だ。少なくとも

そうあるべきだ。マスメディアは、他の古典的な3つの権力——行政、立法、司法——にコントロールを及ぼす要素だ。オープンな経済の成立している社会において、マスメディアは最大のコントロール力を持つ最も重要な要素だ。この要素が欠けていると、民主主義メカニズムはうまく働かない。

ポーランドでは、誰でも雑誌を出版することができる。そして、最も重要な政治グループはどれも自分の出版物を出している。彼らはテレビの時間枠を得ようともしている。問題は、そのような諸政治グループには今のところ独自のテレビ局やラジオ局を買うだけの力がない点だ。

政党が機関誌を持つのは良くない、必ず内部検閲が行われてしまうからだ、という考えが西欧では一般的だが、私はそれに賛成だ。

——しかしあなたはついさつき、ポーランドに自由な報道が存在する証左として、政治グループがそれぞれの出版物を出し始めていることをあげられたではありませんか。そして今度は、それらが「党の」出版物になってはいけないとおっしゃる。——別に矛盾はない。報道の自由とは、さまざま

ROAD 創設者声明 (抜粋)

われわれは、現在の社会生活の最重要課題は自由なポーランドの再建であると確信している。ポーランド共和国は経済の落ち込み、社会不安、そして「連帯」陣営の内部にも現れている急進的な姿勢に脅かされている。これらの脅威に對抗し、ポーランドの民主主義を強化し、わが国を文明的なやり方で前進させるため、われわれは「市民運動—民主行動」を創設する。(……)

われわれは(マゾヴィエツキ内閣の進める)改革プログラムを支持する。ただしそのプログラムにも弱点があり修正の必要があることは認めるにやぶさかでない。われわれは次の諸点を最も重要と考える。

——社会構造や組織内に残る旧体制の残存物

を排除すること。

——大胆な民営化と、効率的に機能する経済構造の創造。

——安定化プログラムの達成を妨げることのない経済拡大をめざす実効的な政策。

——農業の危機を克服し、開放経済への条件づくりをするための、農村への援助。

——一貫性のある社会サービス政策。特に失業者、就業しにくい青年層、社会の最も弱い人々のグループのための政策。

国の当局者の意図がどのようなものであるのかを正確に人々に知らせることが、人々を改革プロセスに参加させるために必要不可欠な条件である。

な政治グループにそれぞれの意見を広く伝える可能性が保証されるべきだという意味だ。どんなグループでもだ。しかし、例えば日刊紙が政治指令に完全に従属してしまうのは最悪だ、これ以上悪いことはない、というのが私の考えだ。

大統領選は？

—ROADの擁立する大統領候補は誰になるのでしょうか。

—それはいろいろな要素に左右されると思う。1カ月かそこらのうちにROADが誰を支持するのか、それとも自前の候補を立てるのかが決まるだろう。われわれはタデウシュ・マゾヴィエツキの政府と、その掲げる慎重な改革の哲学とを支持している。しかし、この政府の中から誰かが立候補を表明したときにその人物を支持するかどうかは、様々なことに左右される。

ただ、現状ではわれわれがレフ・ワレサを候補として支持するのは難しい。これは確かだ。とは

いえ、今のところ、ROADはワレサを攻撃したいなどと望んではいない。なぜなら彼はある種の変革のシンボルだからだ。これからもワレサは一定の変革を行えるときえ私は思っている。

ワレサは、分裂がどのような結果を招くか理解できないほど間抜けな政治家ではない。だから私は、ワレサがROADの一般方針を受け入れる可能性も全くないとはいえないと思っている。

ワレサの言ったことを考えてみるとよい。ROADを攻撃して、「自分に反対して作られたものだ」と言いながら、同時に彼は、自分がROAD設立をもたらしたことを喜んでいる、ROADの存在は嬉しいことだ、とも言っている。

つまり彼は、あまり厳密には敵味方というような分類をしていない。

われわれには近い将来の政治状況がどうなっていくのかわからない。100~150万人が失業することになると見られている。ポーランド社会のムードがどんなふうになっていくのか、われわれにはわからないのだ。

中央同盟の方針

ヤツェク・マジャルスキ：インタビュー

人々は中道組織を待っていた

—なぜ中央同盟に加わったのですか。

—単に加わっただけではない。創設者の1人だ。ポーランドは長いこと中道政治組織を必要としていた。社会が自発的に中央同盟を支持したことがそれをよく示している。人々は明らかに、極右でも極左でもない人々のグループが独自の旗を掲げて登場するのを待っていた。

極左と言ったが、私はその言葉に社会主義や社会民主主義のすべての潮流を含めている。極右とは、排他的愛国主義（ショーヴィニズム）、民族主義、右翼急進主義のことだ。リベラル保守的キリスト教中道派はすでに中央同盟に参加した。

私はいつい最近、ポーランド南部の町ブシェムイシルでそれを見てきたばかりだ。

—具体的な数字を挙げてください。

—中央同盟のメンバーの総数はまだ正確に出されていない。しかしブシェムイシルでは数百人が加盟した。

—ブシェムイシルの人口は？

—7万人だ。

—中央同盟は他の右翼や左翼の諸政党とどう違うのですか。

—第1の違いは、経済と市場に対する考え方だ。われわれの考えは、「国有財産を少なく、私有財産を多く」というリベラルなドクトリンに要約できる。われわれは私営セクターがポーランド経済の中心になることを望んでいる。そうならば、そのひとつの結果として、今は存在しないポーランド中産階級が出現するだろう。政治体制について

言え、われわれは複数主義を支持している。つまり、あらゆる種類の政党が共存し、自由選挙によって政権を取る、そして常に野党が存在する、そんな状況をもたらそうとするのがわれわれの政治モデルだ。「政府を支持する連帯」という考え方には強く反対しており、そんなものはアナクロニズムだと考えている。われわれの意見では、ポーランドでは政治勢力同士がオープンな西側タイプの競争を行える状況になっている。しかし、まだ生まれて間もないこの国の民主主義は、議会をバラバラに分裂させる危険をはらんでいる。そうなれば内閣も危機にさらされる。それゆえ、われわれは強力な大統領を選ぶのだ。われわれは現行のアメリカの大統領はポーランドの状況には急進的すぎると考え、フランス的大統領の道を選んでいく。

「連帯」の分裂について

— 1980年に「連帯」を作った人々が最近になって分裂したことは、ポーランド社会を心配させています。これは本当に、一部の人が言うように個人的野心的問題なのですか。

— 全くもって違う。1970年代以来、ポーランドの政治的反対派のなかにはつねに、自らを右派と称する人々とどちらかといえば左派と称する人々の間の明白な境界が存在していた。後者にはふつう、かつては体制の一部に属していたがそれと訣別した、反対派修正主義者たちが含まれていた。前者の方は、つねに体制に反対し続けてきた、それゆえ公的ポストにつくことができずに影響力もさほど持ち得なかった人々から成っていた。だからこれは個人的野心から生じた分裂ではなく、価値体系の違いから生じたものだ。

— その分裂は現状においてポーランドに益するのでしょうか、それとも不利益をもたらすのでしょうか。

— 利益になると思う。なぜならそれは、われわれの社会に本来存在する複数の選択肢を反映したものだから。現在の分裂は、多政党民主主義という議会システムを生み出すだろう。この分裂を



© Jerzy Strężyński

あいまいにすることは、ポーランドの民主化を遅らせることだ。選挙による選択肢のないところに民主主義はあり得ないからだ。

— そうは言っても、一般に中央同盟と ROAD は敵対する勢力と見られています。両者はお互いに反対しあっているのでしょうか。

— もちろんそうだ、ちょうどドイツでキリスト教民主同盟が社会民主党に反対しているのと同じだ。両党の対立がドイツにとって有害だと考えるのは、馬鹿げているだろう？

— 中央同盟と ROAD のそれぞれの側についている人々についてはどうですか。分裂は、ROAD と中央同盟とに分かれた「連帯」指導者たちの間の友情にヒビを入れましたか？

— それは確かにヒビが入った。今回の分裂劇の最初の段階からそうなり始めた。しかし、この裂け目が恒久的なものとは思わない。とくに、私が中央同盟の創始者なのに私の息子は ROAD 設立に協力しているからね。最初の感情的段階が過ぎれば、ものごとは普通のヨーロッパ的水路に戻っ

ていくと思う。この政治的分裂のショックは、最近のわが国の政治伝統にはみられないほど突然やってきた。そのため人々は感情的反応を示した。しかし時がたてばこの段階も過ぎ去る。

——レフ・ワレサは最近、第3の政治勢力が登場する必要があると言いましたが、彼がどんな勢力のことを思い描いているのか、あなたは知っていますか。

——ワレサが何を考えているかはわからない。しかし第3の勢力はすでに存在している。第4の勢力さえある。第3の勢力はポーランド農民党（P S L）で、第4のはキリスト教国民同盟その他の民族政党だ。

大統領選を早く

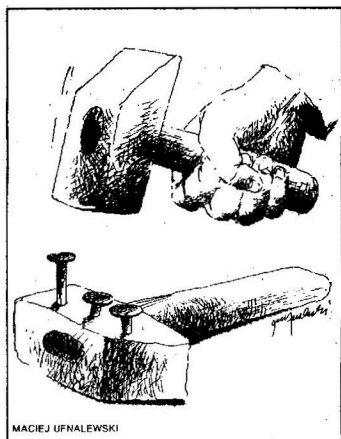
——なぜ中央同盟は大統領選をこの秋に行うよう主張するのですか。

——ポーランドは政治危機に陥っている。現在の権力当局は全く社会的支持を受けていない。無気力、疎外感、社会的緊張がますます高まってきており、それらがストライキという形で現れもする。改革のプロセスが速い速度で進行していることを人々に示すための、はなばなしいジェスチャーが必要なのだ。民主主義国と呼ばれるこの国の頂点に座っている、中欧共産主義政党第一書記の最後の1人〔ヤルゼルスキ大統領〕をその地位から下ろすことは、必ずやそのジェスチャーになろう。

ポーランド政治地図の腐食は現政府にも波及している。数週間前、内閣改造人事の一部が議会で否決されたことは、実質的な不信任のあらわれといえる。政府が頼るべき組織化された議会内多数派は存在しないことが明らかになった。こうした危険な政治状況下、早い改革が必要とされている。そして唯一の近道は、国会で新しい大統領を選ぶことなのだ。

——現行の国会で？

——そうだ。大統領を国民の一般投票で選べるように選挙法を改正するには、国会の3分の2の賛成が必要だが、われわれの側の議員はそんなにい



ない。しかし、現在の国会の過半数なら確保できる。それだけいけばすぐに新人統領を選出できるのだ。ただ、大統領は国民投票で選ぶ方がいいとわれわれは誰も思っている。だから、国民投票が可能になった時点で、大統領選挙をやり直すことになろうと私は考えている（注）。

——では、現在の国会で新大統領が選出されたとしても、それはわが国の今の果てしない政治的過渡期のなかでは一時的なものでしかない？

——そう、暫定的なものだ。しかし、現在の政治的行き詰まりを打破するのに、他に方法はない。

——仮にこの秋に新大統領が選ばれたとして、次に何が起るのですか。

——まず第1に、旧共産党の関係者でまだ議会や行政や軍の要職に居残っている人々は、自動的にその地位を失う。そうすればポーランドの政治地図の色分けは変わり、諸政党の組織化がしやすくなる。結果として自由選挙実現の日どりが早まる。今新大統領を選ぶことは、このプロセスに拍車をかけることになる。しかしその反面、われわれの

中央同盟の経済信条（抜粋）

1 現代的な西側スタイルの市場経済（これは私有財産所有者に法的保証を与え、経済的独立性を提供し、従業員と雇用主双方に結社の自由を保証する）こそが、社会の発展と社会福祉をもたらす、社会不安と独裁者支配の危険を避ける唯一の経済システムである。しかし、そうした経済は必ず、現在の経済発展レベルにふさわしい社会扶助システムを伴わねばならない。

2 中央同盟は中途半端な解決法や「第3の道」という考えには反対である。

3 共産主義経済後のぼろぼろの状態である現状から有効性のある市場経済への移行は、もっとすみやかに進められねばならない。確固たる民主主義は有効な市場経済があつてはじめて存在し得るだろう。

4 民営化と独占解体は、すみやかに行われるべきである。このプロセスのスピードアップのために「ショック療法」を用いることもできる。

5 私营企业を強力に支援する必要がある。

政治陣営からもうひとり、同じくらい強力な候補が立つと、議会内で膠着状態が生じるだろう。私はそれを恐れている。

— 2人の強力な候補とは誰と誰でしょう。

— 伝えられるところでは、ひとはマゾヴィエツキ首相だ。私は、彼は最高の地位につくにふさわしい人物だと思っている。しかし現実的に見れば、彼の立候補は選挙の膠着状態を生み出す。

— もうひとりとは？

— もちろんワレサだ。中央同盟はずっと彼を候補者として支持してきた。私自身がポーランド各地を訪問してわかったことだが、国民の大多数は、ワレサがあきらかな大統領候補だと認識している。大学のある大きな都市では雰囲気少し違って、実際にいもしない候補者たちの中から選ぶという幻想が作り出されている。

— 中央同盟は新大統領の下の首相の候補も持っているのですか？

— いや、持っていない。われわれのもとの計画には政府の改造は入っていなかった。大統領を交代させ、マゾヴィエツキの手を縛っている手かせをはずしてやれば、マゾヴィエツキが政治・経済改革を進めると信じていた。今、ワレサとマゾヴィエツキの間にある種の対立関係が生

じてきている。これは私にとって心配の種だ。なぜならわれわれはマゾヴィエツキ政権に代わる政府のことも考えたことがなかったからだ……。私は、マゾヴィエツキ政権は首相が自らに課した任務を果たし終るまで、すなわち次の国会選挙の時まで、存続するのが良いと思っている。

— ワレサとマゾヴィエツキの敵対関係を作ったのは誰ですか。

— 現実の成り行きだよ。彼らはそれぞれ、両立しそうにない2つの政党に関係したのだ。ワレサは中央同盟という波に乗り、マゾヴィエツキはROADおよび反中央同盟の諸グループと結びついている。マゾヴィエツキが、ワレサと競争するつもりはないと明言してくれれば大歓迎なのだが、今のところそういう発言はない。

ROADについて、また労組について

— ROADの影響をどう考えますか。

— 私はマスコミが広めている余りに樂觀的なプロパガンダを信用していない。地方市民委員会代表の最近の会合では、地方代表の3分の2は中央同盟を支持、3分の1がROADに好意的だった。全国どこでもこれと似た割合だと思う。

— 中央同盟はROADに脅威を感じていますか。

—それは全くない。われわれはROADの登場を、ポーランドが政治的にメキシコ化しないことの証左として歓迎している。われわれがROADに関して残念に思うことがあるとすれば、それは彼らがわれわれをのしるキャンペーンを行っていることだ。

—中央同盟はどの社会勢力を最も依り所としていますか。

—主に若い労働者と農民だと思う。知識人層は一般にROAD支持傾向が強く、われわれを支持している者は少ないだろう。また、われわれの人気は大都市よりも小都市や地方の町村で高いように思う。私の考えでは、われわれはオーストリアの人民党と似たような環境にある。

—レフ・ワレサは繰り返し知識人を攻撃していますが、知識人に対する中央同盟の姿勢はどのようなのですか？

—ワレサが知識人を攻撃したことはない。彼が攻撃したのは政界の古参エリートだ。私も知識人のはしりとして言うが、中央同盟もレフ・ワレサも知識人に何ら偏見を持っていない。中央同盟は単にエリート層の人事交代と新しい人々の登用を促進したいと望んでいるだけだ。われわれがエリートたちに嫌われるのはまさにそのためだ。

—労働組合についてはどうですか。あなたがたの描く思い切った民営化経済モデルの中に労働組合の場所はあるのですか。

—労働組合が意味を持つのは、雇用主がはっきりしているときだけだ。ポーランドの雇用者が明確に規定されない限り、ポーランドの労組も明確に規定され得ない。現在、「連帯」は労組であると同時に国営セクターの経営者でもある。労組議長〔ワレサ〕はある時は労働者のストライキを中止するよう説得し、翌日にはストを激励する。ある時は労働者の味方をし、翌日にはベルトをきつく締める〔がまんする〕よう言い聞かせる。これは労働組合にとっては矛盾した、不健全な状態だ。私は、雇用主と従業員の区別がはっきりした民営経済があってはじめて健全な労働組合が存在でき

ると信じている。

中立系報道はまだ生まれない

—中央同盟に属していることで、ジャーナリストとしてのあなたの判断の客観性に何か影響があるのでしょうか。

—それはある。残念なことだが、できれば独立した（中立の）新聞に執筆したいと思うが、ポーランドにはそんな新聞はない。独立した報道が成立するほどには、この国では時機が熟してはいないのだ。まず第1に、政治舞台で何らかの秩序が整わねばならない。だから、最初の時期は政党系新聞の時代だ。政治的背景ができあがった後にはじめて、政治的色分けを超えた独立系新聞の生まれる時がやってくる。仮に今、自由な新聞が発行されたとしても、起こりうる事態はふたつにひとつだと思うね——誰も読まないか、どんなに抵抗しようとする中にもまきこまれておしまいになるかのどちらかだ。

〔注〕このインタビューから2日後の8月9日、レフ・ワレサは声明を発表し、秋に現国会で大統領を選ぶという考えを捨てて国民投票による大統領選の方針を取るとした。これに関して中央同盟リーダーのヤロスワフ・カチンスキは、ワレサの新しい方針は「中央同盟の立場と矛盾するものではない」とコメントした。



Rys. Jacek Gasiulowski

【2頁から続く】

ベルリン入市に関する新規則が発効。ホテル予約証、知人や親族による招待状、一定金額のハードカレンシーのいずれかの提示が必要に。ポーランド外務省はドイツのこの措置を非難（しかし東西ベルリン間の通行はフリーパスで検問所もないため、この規則の実効性は不明）。●ガソリン値上げ。1と2400ズウォティだったタイプのガソリンは3200ズウォティに。

9月2日 ヤシチェンピエ協定（80年9月3日）10周年記念式典が同市周辺地帯で祝われる。

9月4日 オーストリア、ポーランド人の入国ビザ取得を再義務づけ、6月から適用（1988年にビザが撤廃されて以来オーストリアに入国するポーランド人が急増し、オーストリア政府はポーランド人によるヤミ市や軽犯罪の増加に悩んでいた）。ポーランド側も対応してオーストリア人にビザ取得を義務づけ。

9月5日 グダンスクで「連帯」全国委員会。「ガゼタ・ヴィボルチャ」紙の「連帯」ロゴマーク使用を禁ずる決議が賛成26、反対21、棄権12で可決される。●イギリス訪問中のオニシキエヴィチ国防次官、ワルシャワ条約機構は純然たる協議機関に变身しつつあると語る。●ポーランド外務省によれば、ソ連はポーランドの研究機関に対しカティンの森事件の関係文書すべての閲覧を許可する決定を下した。●ロイター通信がポーランド労働省スポークスマンの言として伝えたところでは、失業者が80万人以上（失業率6%）に達したという。●当局はジャルノヴィエツ原発建設を止めるとともに、少なくとも今世紀中は原子力発電計画を放棄すると決定。

9月6日 『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙、「連帯」ロゴマークの権利が「連帯」全国委にあるかどうか疑問を表明。●スウェーデン、ポーランドでの公害防止プロジェクト（約3000万ドル相当）を承認。

9月7日 スクピシェフスキ外相、カシュレフ・ソ連大使と会い、ソ連軍のポーランドからの撤退問題を話し合う政府間交渉の早期開始を提案。

9月8日 ワルシャワ体育アカデミーでユゼフ・ビウスツキ元帥記念像の除幕。

9月9日 地方市民委員会総会。150人の代表が出席し、ヤルゼルスキ大統領早期退陣と年内の大統領選を支持するが、ワレサを大統領候補として推すことは時期尚早として見送る。

9月10日 W・フラシニェク、10月の代議員大会で「連帯」下シロンスク地区議長を辞任すると発表。ROADの指導者として政治活動に深くかかわりながら「連帯」地区議長も兼任することは誤解を招く、との理由。

9月12日 クーロン労働・社会政策相、現在82万の失業者数は年末には125万に達するだろうと語り、これに対処するため政府は地方での雇用創造に努力していると述べる。●ポーランド国鉄当局と4つの鉄道労働組合の話し合いの結果、3組合が5万ズウォティの賃上げを受諾。運転士組合だけはこの提示を不満として明日からのストを通告。●ポーランドとチェコスロヴァキア経済会議が開幕（於プラハ）。オドラ川汚染防止策は交渉されず、チェコのストナヴァ・コークス工場（ポーランド国境に近接し公害が懸念されている）建設中止問題、両国国境開放問題は合意を見ずに終わる。

（訳編：高橋初子）

編 集 後 記

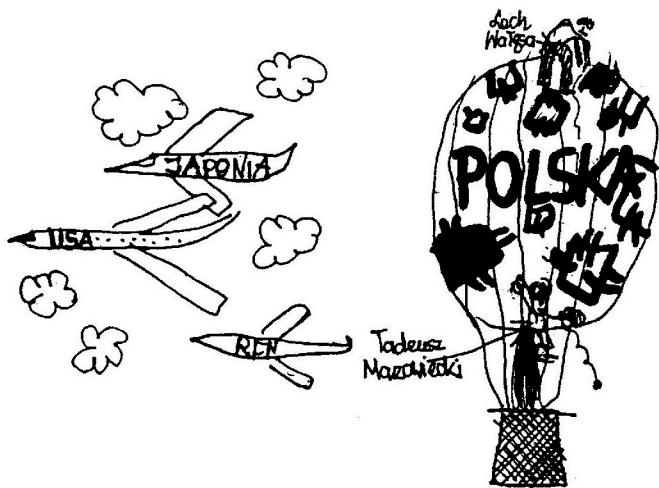
☆大統領選挙投票日が11月25日（日）と決まり、ポーランドは現在、ワレサ陣営とマソヴィエツキ陣営にまっぴらつに別れて選挙戦のまっただ中。

☆ポーランド滞在中、この両陣営の人々に会って話を聞いたのですが、両派の違いがいまひとつよくわかりませんでした。戦略、戦術の違いというよりも、民主主義についての基本的な考え方、構え方の問題のような気がします。

☆そのポーランドで、正式に発行された「連帯」切手（先月号の表紙の右下にある）を見て、この間の

変化の大きさを実感しました。わずか1年前までいわれる地下切手としてしか見られなかったものです。カティン事件を記念する切手も正式に出ています。同じように、ワレサ自伝がこの本屋にも並んでいました。フリーマーケットの隆盛、西側企業の広告の氾濫とともに、新年ポーランドを象徴しているようです。

☆何人かの人から、今のソ連・東欧の変化は元をたどれば1980年の「連帯」の運動にあるのに、世の中はこのことを忘れて、という議論を聞きました。同感。前途の困難さを考える時、これは悲痛な叫びにも聞こえます。 1990年10月17日（み）



rys. Joasia Hartwig

rys. Joasia Hartwig
Gazeta Wyborcza

「アメリカ」「日本」「西ドイツ」と書かれたジェット機の飛ぶの横目に見ながら浮かぶ、つぎはぎだらけの気球「ポーランド号」。気球の上にいる人物はワレサ、下はマゾヴィエツキとある。

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research

〒177 東京都練馬区下石神井6-35-7
電話 03-904-0427 郵便振替 東京 2-81069

6-35-7 Shimo-Shakujii, Nerima-ku, Tokyo 177 JAPAN

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)